[Work in Progress] 研究報告

道元が道元和尚廣録と正法眼蔵に施した誤り防止符号

得丸　久文

Error Avoidance Coding implemented by Dogen in his Dogen-Osho-Koroku and Shobogenzo

釈迦の八正道に「正語」とあるのは，一生を通じて正しく精進した者が，自分の成果を人類に言語情報として提示することをいう．もし自分のテキストが妨害される恐れがある時，著者は対抗手段をとる必要がある．道元(1200-1253)の主著「正法眼蔵」の奥書と「道元和尚廣録」の識語は書誌学的に珍しいが，これは日本達磨宗から道元門下に参集した弟子たちと信頼関係が得られず，「一人虚を伝ふれば万人実として伝ふ」(廣録，上堂語 131)ことを心配し，「切に忌む，錯流伝を」(同193)と注意していた道元の施した誤り防止符号ではないか．

「正法眼蔵」は，現成公案第一から出家第七十五までが連番管理されているほか，各巻の奥書として巻名といつどこで示衆(師が衆僧に示すこと)したかの日付と場所が書き込まれている．たとえば「正法眼蔵現成公案第一　これは天福元年(1233)中秋のころ、かきて鎮西の俗弟子楊光秀にあたふ．建長壬子(1252 年)拾勒」，「正法眼蔵道得第三十三　仁治三年(1242)壬寅十月五日書干観音導利興聖宝林寺　沙門，同三年壬寅十一月二日書写之　懐奘」という具合だ．

連番であるため，第一の拾勒が建長 4 年であれば残りもすべてそれ以降の拾勒となり，人生最期の著作であることと，天福元年から建長 5 年まで思想にブレがないことを示す．

「道元和尚廣録」(寺田透現代訳，筑摩書房，1995 年，門鶴本を底本とする)は，全部で十巻だが，嘉禎 2 年(1236)から示寂までに道元が法堂で弟子たちに話した 531 の上堂語を時系列的に拾勒する巻一から巻七にかけては，各巻の冒頭に「本の京なる宇治の郡の興聖禅寺を開闢せるときの語録の第一　侍者詮慧編む」、「越州に開闢せる吉祥山大仏寺の語録侍者懐奘編む」、「永平禅寺語録第五　侍者義演編む」と上堂が行われた場所と書記の名前が記されているほか，各巻末には「上堂数三十四，頌古四十五首」，「上堂七十一，頌十三首」と上堂語と頌(漢詩)の数を数え上げた識語が書きこまれている．恐らく清書を終えた後で，道元自ら数えて書き入れたのだろう．

道元が著作を保護する必要にかられて誤り防止のために奥書と識語を書いたことを理解した読者は，道元のものとされるテキストを読む際，まず誤り訂正符号を確認することが求められる．符号のないものは改ざんや偽書を疑う必要がある．

正法眼蔵には，75 巻本の他に新草 12 巻本というものがあり，それには示衆日がない．その「八大人覚」奥書に病床の道元が「假字正法眼蔵等皆書改メ、並ビニ新草具(トモニ)都蘆(スベテ)一百巻可撰之云々ト」言ったとあり，多くの学者はこれを信じて，道元は 75 巻本を書き直すつもりだったと解釈しているが，符号によって保護されていない 12 巻本は偽書の疑いがあり，その奥書も信用してはいけない．また 75 巻本を仕上げた後，道元はすぐ示寂しており，書き改めるつもりなどなかったことが奥書からわかる．奥書の論理性を尊重すると従来の道元研究は大きな見直しが迫られることになる．

また，道元の語録としては，道元示寂後に宋の無外義遠が 75 の上堂語を抜き出した「道元禅師語録」(通称「略録」)と江戸時代の卍山道白によって編集された永平廣録(卍山本)があるが，これらは識語をもたない．門鶴本と略録，門鶴本と卍山本の間には多くの齟齬があるが，識語によって保護されている門鶴本の記述が著者の真意として優先される．たとえば有名な「眼横鼻直」は，門鶴本にはなく，略録と卍山本にのみある表現だが，これは道元像を歪めるための改ざんと考えられる．

昭和 4 年に岩波文庫から出された「道元語録　正法眼蔵随聞記　懐奘編　和辻哲郎校訂」には，原本が存在せず，もっとも古い写本が江戸時代のものである．随聞記の内容は，正法眼蔵や廣録と重なり合うものがまったくなく，むしろ矛盾する内容が目立つ．一般に道元の教えは「只管打坐」と言われるが，これは随聞記だけの教えであり，正法眼蔵や廣録の教えにはない．「正法眼蔵随聞記」は偽書であろう．

眼横鼻直と只管打坐を否定したとき，どんな思想家として道元が我々の前に姿を現すのか，実に興味深い。

独立研究者

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan